春季講演会

龍山里耶秦簡に見る忽卒の文字

新井儀平（光風）

今日は、秦の始皇帝時代の日常の書写体、里耶秦簡（図1）の文字について話します。先に大東書道研究に拙論を出しました。今日は映像を多用して、目でもってそれぞれの文字の特色について述べさせて頂きたいと思っております。まず、本題に入る前に今日の内容と直接的に関わりのある草書という書体の萌芽の時期これが関係してきます。それから忽卒の文字、それについて話しておかなければならないかと思います。草書の胎動の時期、つまりよく言葉で書道史では発生といいますが、発生というのは具体的に草書がスタートしたと言い切る時に使う用語で、私は昔から発生の以前に胎動という用語を別に使っています。それは紛れもなく草書が生まれるという状況を把握しての用語です。たとえば、お腹に赤ちゃんがいるとしたら、これは間違いなく子供が生まれる、そういう状態の時に、赤ん坊の顔は見えないけれども胎動という言葉、書では確実に発生するという見込みのある時に、私は胎動という用語を使っています。ですから草書の胎動という場合は具体的に草書の発生した時期というのではなくて、字形や書法に変化があらわれ、もう間違いなく草書が発生する直前という意味で、こういった用語を使っています。

それで、こういった時期がいつあったのかということですが、実は今日の話の中心になります秦の始皇帝時期以前、つまり隷書の書かれる以前、戦国時代すでに草書は胎動しています《包山楚簡》（図2）。昔、書の概念では篆書があって、隷書があって、やがて草書が生まれて、行書が出て、最後に三世紀半ばごろ楷書が発生して、四世紀半ばごろ完成するということになるのですが、もう草書は隷書の次という概念ではこのごろ説明がたたなくなったのです。なぜなら、隷書以前、早くも篆書の時代に草書らしい、草書的要素をもった字がかなり出現しています。そうするとこれから書体の概念というのは簡単には言葉で言えなくなるほどになってきました。事実上確認できる資料がたくさん出てきたからなのです。これは目で確認がとれれば、何の問題もないですね。ですから今日はそういうことを話しながら映像を見ていただこうと思っております。

図1　里耶秦簡

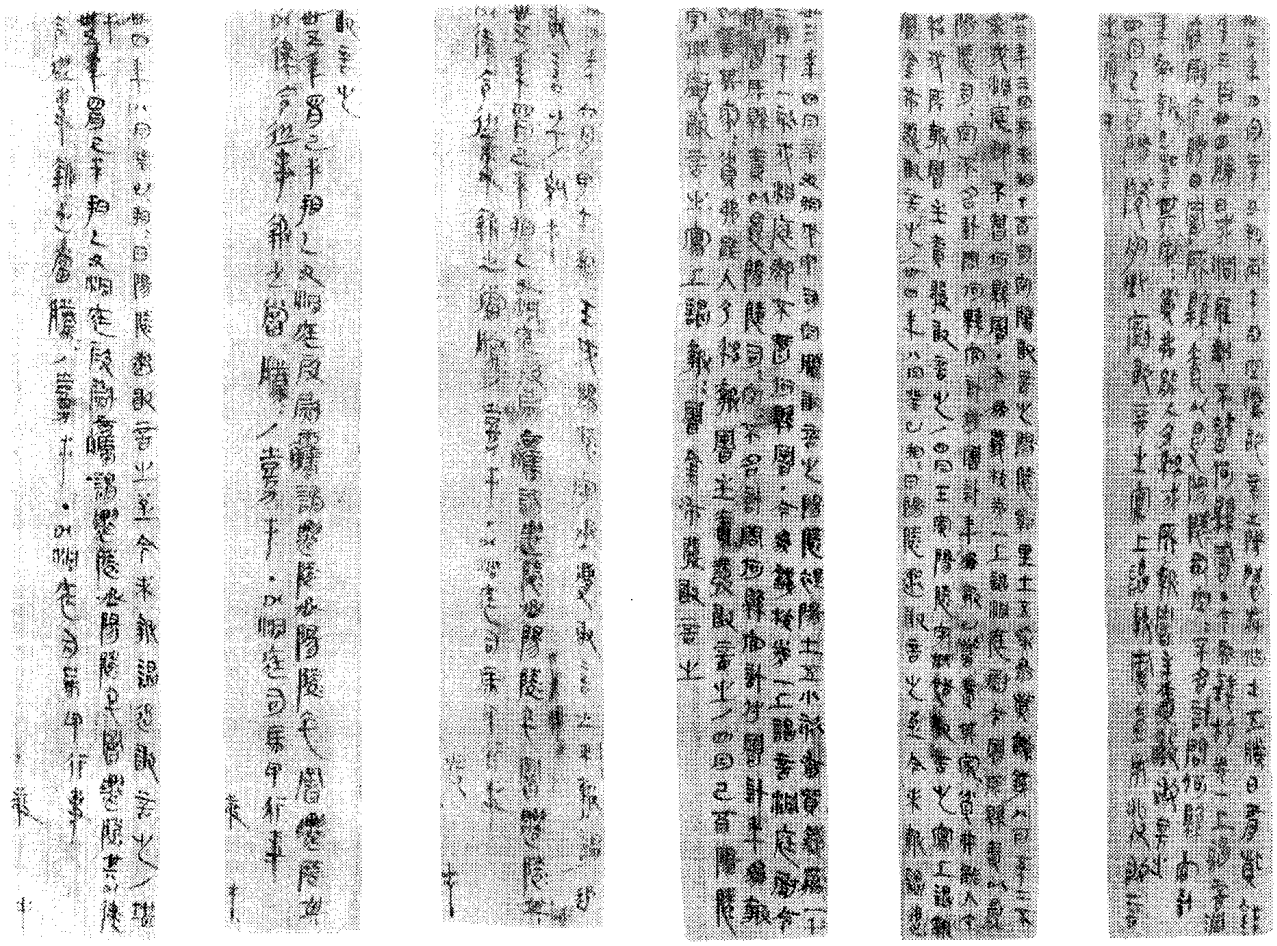


図2　包山楚簡

篆書の時代、殷周の青銅器の銘文によって文字が崩れるということは考えられません。それから刻石、石に彫ったものは字が崩れるということはないですね、改まってきちんと準備してかきますから。ところが篆書の時代といっても、用事がある時には呑気にゆっくり書いているようでは何もできません。そうすると篆書ですごい早書きという動作が必然的に行われるわけです。でなければ日常の用事が成り立ちません。篆書の時代に書かれた肉筆というのはかなりいい加減なものが少なくありません。間違った状態になっているものもたくさんあります。今、肉筆の出土関係のいろいろな字書が出ていますが、その中にそのまま収録しますと、全く読めないものがたくさん入っています。その全部を一応出てきた資料として収録されていますので、線と線が外れてしまって釈文があってもまだ理解できないという変な字がいっぱい出てきます。それほど日常の字というのはいい加減です。そういった中で文字がものすごいスピードで変わっていきます。私たちが賞状を頼まれて書くとか、表札を書くとか、役所に届けを出す時はまず文字は崩れません。ところが電話を受けて早書きでメモをすると後で自分が書いた字がなんという文字かわからなくなる。つまり日常の字というのは準備がなくてその場でサッサと書くことが増えるので、非常に崩れ方が激しいです。今日はこのテーマの中ではそういったことを先にちょっと理解していただければこれからの話が楽になります。まず里耶秦簡以前の戦国の文字を見てください。

文字が崩れるというのはこれまで出土した中から、いくつかの理由が考えられます。その一つはたとえば昔、春秋戦国ですと紙がありませんから、五ミリとか一センチの竹の札の中に文字を書こうとすると、書ききれないほどでぐちゃぐちゃな字になりやすい。どうかすると偏を真下に持ってきたほうが書きやすいので、サンズイなどは取っちゃって、横に倒して下に書いた方が書きやすい。つまり狭い所に字を書こうとすると字形が崩れます。たとえば戦国の《包山楚簡》というものに「門」という字がありますね、縦画を書こうとすると簡の両端に線がくるのです。で、早書きで書くと外れるのです（図3）。実験してみました、四十本くらい連続でいくつかの文字を書いてみると、右側は外れにくい、ただ左側はすごく外れやすい。そういうことによって、変わってしまった字が実はいっぱいあります。今日、「門」という字を草書で書くときに縦画なしで書く字がありますね、第一画は普通なら縦画から始まって右へ書くのに、縦画をやめてしまうのです。

「車」もしくは「車」のついた字（図4、《曾侯乙墓竹簡》）では、丸くなっている一番左端のところが紙のラインから外れますと、縦画状の線が一本なくなる、そうすると次の線がカタカナの「ヨ」みたいになって今度は右が外れ、真ん中

に「田」があったはずなのに、草書では中央に横画が三本入っただけになってしまうわけです。「軍」という字を書くと草書では中三本で縦一本です。「連」という字を書くとき縦一本、横三本にシンニュウです。縦画は消える。実はこういうものはかなりあるのです。つまり簡の幅が狭いことが原因で字が崩れたもの、まずこれが一つです。

図3　包山楚簡

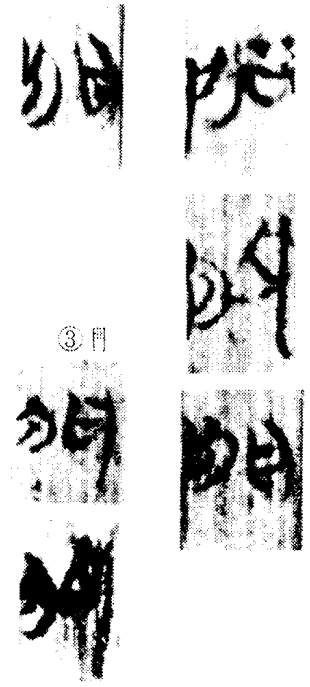
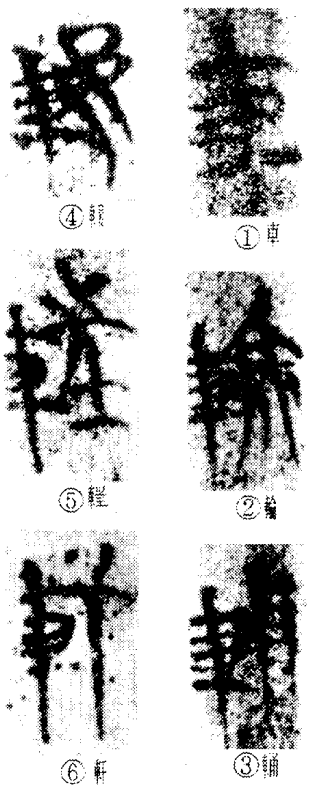


図4　曾侯乙墓竹簡



それから早書きですから、リズムが出ます。そうすると円転と言って右回転が発生し、グルグルまわりますね。英語などは横にスペルは行きますが、中国の文字は甲骨文から下へ移動します。そうすると、下へ下へという回転がどんどん速くなって戦国時代には、丸くなったリズムの字形が盛んに出てきます。丸くなることによって、また字の崩れ方が変わります。

また早がきによって字画が減ってきます。これでまた崩れます。考えるといっぱいある。同じものでも、例えば、使用頻度の高い文字は早く崩れる傾向があります。逆に、最後まで昔の金文のような古い文字で書いている字もみられます。なんでこんな古い字がいつまでも残っているのだろうと思うくらい字が崩れない。実は速度はまちまちなのです。これは現在私たちが知っている書道史の中のものほとんどがそうです。行書というものの中に、必ずといっていいほど草書っぽいものが入っています。草書の中に、必ずといっていいくらい行書が入っています。むしろこれは自然なことなのかも知れません。もし完璧な草書だけ、完璧な行書だけの字を探そうとすると、古典の中でも意外と少ないのです。たいていのものは混ざっています。これは文字変遷での段階での使用頻度が関係していると思います。

また竹から紙に変わると、幅が広くなりますから、今度は気持ちが大きくなって自由に書けるようになりますから、気持にも変化が生じてきます。いよいよ我々が考えている文字を楽しむような状況が起きてきて、ものすごく太い線が登場してみたり、渇筆が出てきて、左右にはじけたりします。簡の狭い時にはそんな状況はまったく発生しない。そうすると、

木簡の幅が広くなった段階で字が変わります。美的意識、簡略の方法にも変化が生じてきます。今日は簡略の姿に見る線の点状化現象、つまり、線の状態のものが点の状態に変化して崩れていくところを中心に話します。

秦の始皇帝時代にこんなものが登場するとはこれまでまったく考えられませんでした。実はその前兆が戦国時代にあります。長い線がすごくつまって短くなり、点に近い線が戦国に登場しています。このことがまず、先ほど話した萌芽なのです。点状のものが、信じられないくらい省略になっています。後々の漢代そのあとの魏、晋、南北朝といった後の草書の字形にどのような影響を及ぼしたのかということですね。どんな形で影響しているのか、今日はそういったことで映像を使ってお話していきます。

これは戦国時代の《包山楚簡》中に見える字（図5）です。線がこれだけつながる、こういうことがすでに戦国に始まっているという事実です。これは先ほども話した円転のリズムで、「日」という字を書くときに、この第一画ですが、縦を書かないで「日」を書くのです、いきなり横から、これは筆順そのものが変わってしまっているのですね。こんなことがまず、戦国に起こっているということです。それではこれ以後の秦始皇帝時代の肉筆《里耶秦簡》について、順番に見ていきます。

実は里耶秦簡は三万六千本出土したのですが、影印されて現在知られているのは三十三枚しかありません。しかし、簡幅が広く裏にも文字が書いてあります。字数は判読しづらいものも含めて約4千字あります。四千字についての調査結果を皆さんにご報告いたします。

図5　包山楚簡

図6は簡の一部分ですが、たった一枚の簡の中に出てくる「月」字です。一つの「月」は一行目です。左側の「月」は三行目に書かれた「月」なのです。同じ人間が一枚の木に書くのにこんなに違うのです。両方とも月のことで特殊な字ではないですね、しかしこれだけ変えて書く。ということは、この時期にはこういうことがすでに頻繁に行われていたのだ

と思うのです。これはそういった資料です。

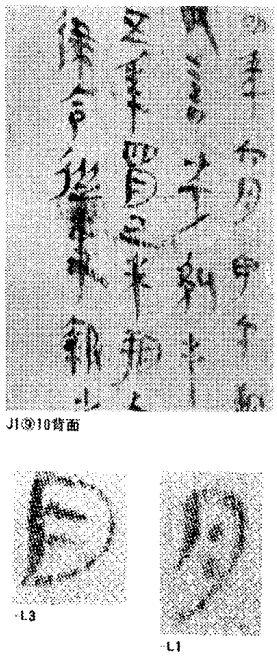


図6　里耶秦簡　同一簡中に見える「月」字

図7はゴンベンです。一行目、二行目、四行目、形が全部違います。篆書字形の時の縦画が微妙に残っています。実はこの後この動作が発展していって、最後に縦が取れます。そして普通のゴンベンに変わります。一つの簡に、わずか数行の間にここまで違ったものが登場するということは、このころは他の字を書いたら読めないというのではなくて、どれを書いても通ずるような状態になっていたのだと思います。「言」図8、右上は小篆で一般の篆書の形なのですが、一番左になると今日のゴンベンにほとんど近づいています。つまり当時、秦の始皇帝ごろにはどの字も使っていたわけで、これは不思議なくらいです。

図9、「之」は一行目と四行目に出ている形です。ところが四行目の字形は点を重ねたような字でできています。今日の話はこのように線が点状に変わるという話を中心にしていきたいと思います。

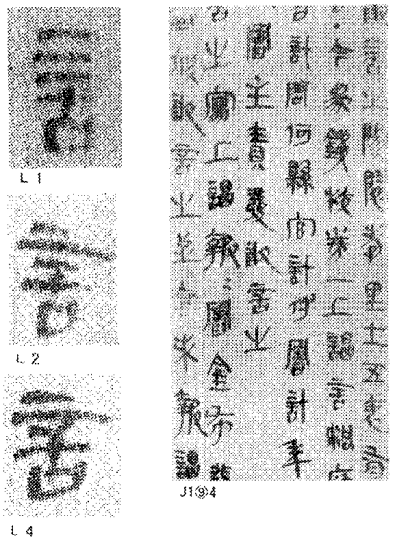


図7　里耶秦簡　同一簡中に見える「言」字

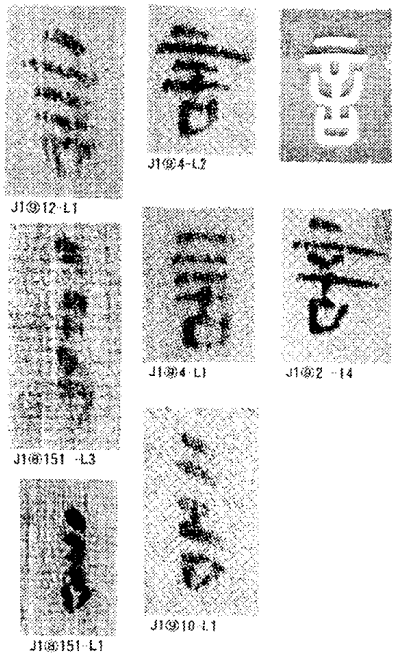


図8　「言」字に見える「線の点状化」

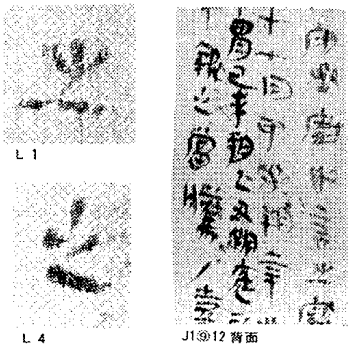


図9　里耶秦簡　同一簡中に見える「之」字

「馬」（図10）ですが、本来篆書では「馬」字というのは下が点ではありません。長い線です。それが隷書の時には点に変わりますが、図の上から順に点が四つ、三つ、二つといったように変わっています。これらは本来点ではなくて、長い線だったのです。点を三つにしたり二つにしたり一つにしたり、かなりいい加減です。こんなことがいろいろな字で使われているわけですね。事実こういった「馬」字のようなこのようなやり方は特殊なことではなくて、さまざまな字につかわれています。里耶秦簡の時期は秦の始皇帝統一後で、睡虎地とそんなに時期は変わらないのですが、あの中にはこういった現象はほとんどありません。里耶という場所は四川省に近く、湖北省にも近い。睡虎地と比べると直線距離で六百キロくらいです。全く睡虎地には線の点状化現象が現れていないが、里耶にはかなり多いのです。

図10　里耶秦簡「馬」字に見る「線の点状化」と第一画の孤立

その点状というのは、いつごろから始まったということになるのですが、図11に掲出した《曾侯乙墓竹簡》を見て下さい。これは戦国の初期で今現存する竹簡の最古のものです。この中に「馬」字はかなり数が出るのですが、一つだけ左上のような、楔形のとがった点状の字が登場します。こういったものは後に点に変わる前触れ、これが今現存最古の竹簡ですからこれ以上前の資料はありません。この時に点ではないけれどもこういった現象がちらっと起こっているということです。しかし里耶秦簡の時にはあそこまで変わるわけですから相当なスピードだと思います。

図11　曾侯乙墓竹簡　戦国初期

図12の「洞」字は同一簡中に見える字ですが、片方は二行目、片方は三行目に出てきます。上の段の「洞」字は、きちんと篆書のサンズイに「同」字を書いています。下の字はサンズイまでは篆書で普通なのですが、「同」の横画を点に変えました、二本目の横画も点に変えました。一番下の「口」もまた点に変えました。結果的には点3つに変えてしまった。先ほどと同じですね。こういった線の点状化現象（「口」を点に作る）ことは時代が下ったあとにも影響を及ぼしているのです。

図13は「同」の形の違ったものだけを拾い出しました。上は今の「口」がついた形です。上から二つ目は「口」が点二つの状態です。三つ目は、横の線を書いたのか書いてないのかわからないですが、かなり中途半端、一番下の口は点一つです。同一の所から出土したものにこうした字が使われていたわけです。

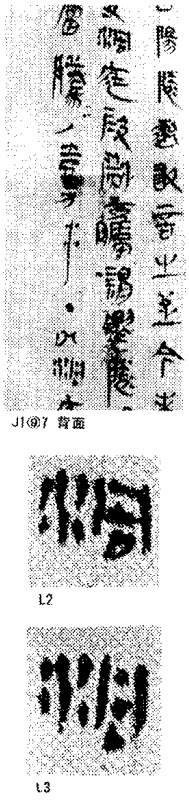


図12　里耶秦簡　同一簡中に見える「洞」字

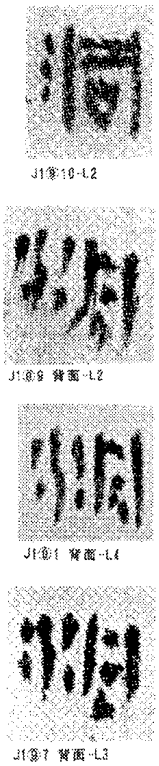


図13　里耶秦簡「洞」字に見る「口」の変化

図14は里耶秦簡よりも前の戦国の《包山楚簡》ですが、線が点状に変わった萌芽の時期だと思います。「月」を見た場合に、「月」の点が点ではなくて、横でもなくて、点状に近い。「周・門・君・加」字なども同じような姿です。里耶秦簡の場合はそれが完全に点状化しているということです。この「線の点状化現象」というのは、私が作った言葉です。図15は《龍崗秦簡》です。これも実は、秦の始皇帝ごろですが、極端に右下がりで、不思議なことに時代は里耶秦簡とあまり変わらないにも関わらず点状となると、ごく僅かしかありません。この字は最近出た本に出ています。写真が悪くてほとんど字よく見えません。

図14　包山楚簡　戦国中晩期（前三一六）

図15　龍崗秦簡　秦代末年

すこし里耶秦簡中の「口」を集めてみました（図16）。「口」を二点に書く。この形はなんと今日でも盛んに使われているものです。「尚」字、「司」字は二点ですね。この「可」字、「如」字は点が三つです。「倉」字も、下点が三つです。里耶秦簡ではどの文字も大体このようになっています。

図17では、本来、線であったものが点に変化したものを、拾い出してみました。右上の字は「日」ですが、下の細かい数字は、出土した場所の整理番号、L1というのはその一行目ということです。「日」、「月」の横画は点になっています。「酉」字も点二つです。かなり多くの字にこれが使われていますね。

図18は漢代の馬王堆漢墓帛書、老子の有名な甲本です。時代は今映している里耶秦簡の一つ後の漢代ですが、老子の甲本でも実はよく見ますと、字形は一種類だけでなく、たいていの字に点状に作る方法が使われているのです。ほとんどの字が、図に掲出したように例外なくこんな調子です。今盛んに物が崩れている最中ではないかと思うような字が盛んに出てきます。秦の始皇ごろから漢代に関しては、そういう時代だったのであろうと思います。

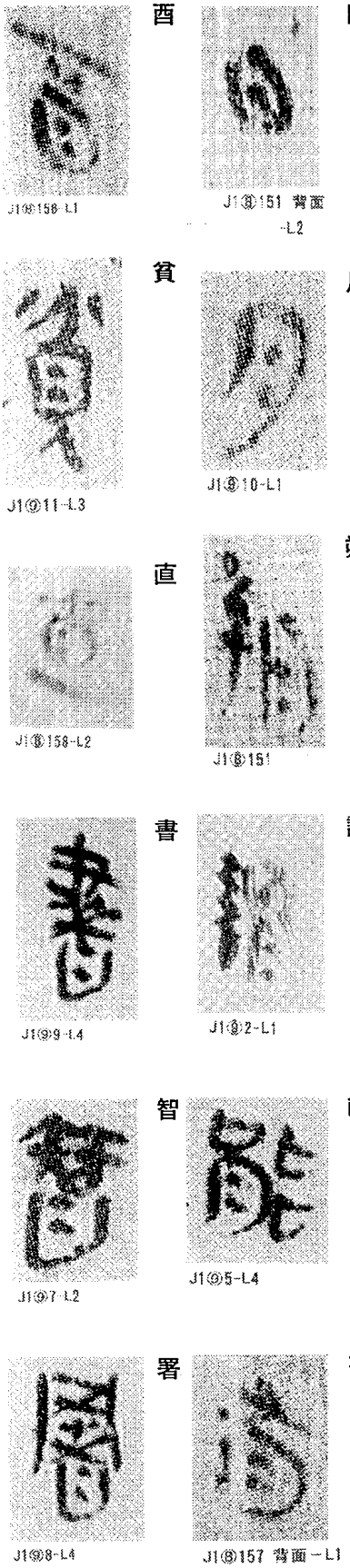
図19も馬王堆の中から拾ったものですが、みんなどの字も横画が点状化しています。そうすると里耶秦簡に点状化現象が起きてから以後、盛んに使われるようになってきたと考えられます。図20の字、これもそうですね。同じ字ですが、点状になるものとならないものがあります。

図16　里耶秦簡「線の点状化」「口」を「点2・点3」状態に作る

尚　司　可　如　倉

図17　里耶秦簡「線の点状化」「線」を「点状態」に作る

日　月　朔　謂　能　有



酉　貧　直　書　智　署

図18　馬王堆漢墓帛書　老子・甲本（前一九六前後）

有　者　自　目　為　於　道　焉

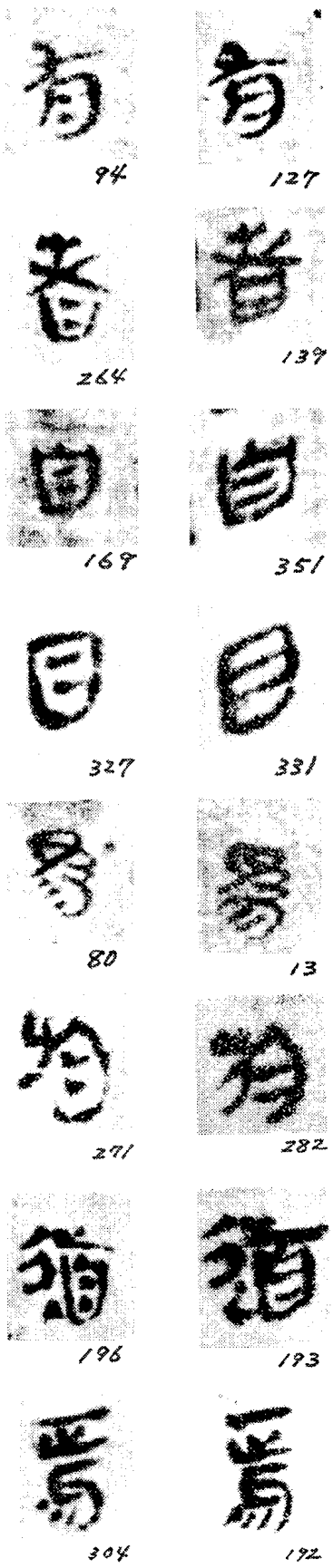
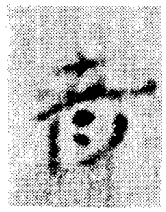
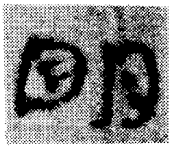
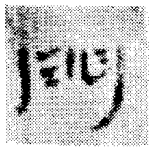
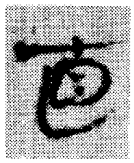


図19　馬王堆漢墓竹簡（合陰陽）

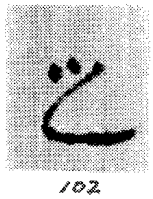

122
者


114
明

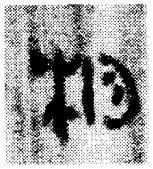

104
門


120
直

122
胃


102
之

馬王堆漢墓竹簡（雑禁方）


8
相

132
皆

脂

132
滑

2
責

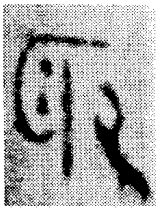
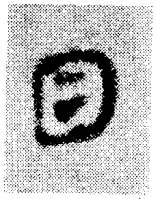

7
取

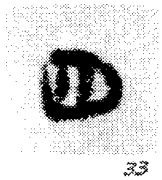
図20　馬王堆漢墓竹簡（十間）

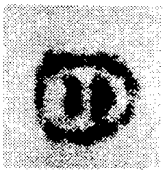
79
目


66

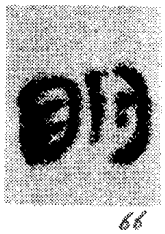
50
者

83


33
四


67

50
明


66

21
勿

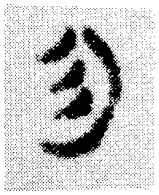

55

図21に示した資料、これは面白いものです。点状化といってもちょっと違います。まずですね、「騰」字は偏が「月」の形をしていても、これは「舟」の形のものですね。図の最初の①は普通です、横に二本切っているのです。ところが次の字②になると、点を二つ打ちながら続けようとする動作が起こる。ちょっと状況がちがうのです。それで、③の写真は丸い点に変わっています。問題は図の④ように点が二つ繋がることです。こんな例は今まで色々出土の文字資料を見てき

ましたが、他に例がありません。先ほど横の線の二本が点に変わったという話をしたのですが、縦に位置する二つの点が今度はつながりだすという新しいことが起こり出す。今までと状況が変わるのです。「謂」の月部分も点一つに変わる、しかしこれは点が明らかに今までと違うのは、点が縦移動に変わっていることです。これはこの時期に今までになかった新しい事実です。

これから以後点を縦に二つなげるというのが盛んに行われるようになります。ここに登場した、４種類の字の中のつながりを私は最初に見た時にびっくりしました。私たちが「月」を書こうとするときに、横二本を英語の「z」のように横をつないで書きますが、それ以前にもっとくずしたこういう書き方があったということに注目しておいて下さい。これは全ての書体が出そろったあと、楷書を崩すという時の崩し方だと思います。

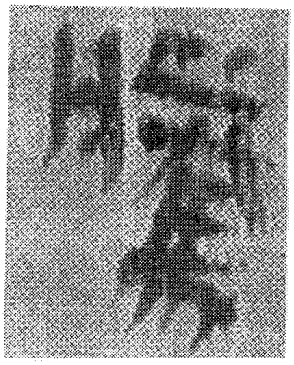
図21　里耶秦簡　秦代に初出を見る草書的字画の文字　線の点状化と点の線状化

②
J1⑨8 背面－L2

①
J1⑨11背面-L3

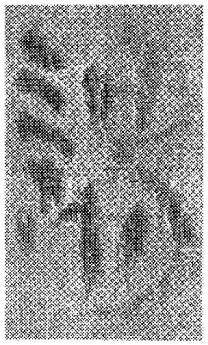
④
J1⑨1 背面－L4

騰


③
J1⑨12背面-L4

J1⑨984 背面－L1

朝


J1⑨5-L1

謂

「騰」に見る偏の横画二本が、点二つが縦に変わったというのはかなり特殊な例です。が、後の書法に大きく影響しているようです。この後の例をいくつかだします。図22は銀雀山漢墓竹簡です。山東省から出土したものですね、これは前一四〇年以後ですから、漢代なのですが、その時期に使用されている例を見つけました。図の左側の字、これですね。これがいくつか出てきます。図の右の方の字は点二つが離れていますが、左のものはついています。こういうことが漢代に行われていたことがわかります。図23は馬王堆漢墓竹簡ですが、この中に線を縦に切って書く字が登場します。これはもう今までもの文字資料を見てくるとすぐに納得がいくのです。この字の崩れは横二本から崩れてこういうものになったのではなくて、点二つのつながりからこうなったのです。

図22　銀雀山漢墓竹簡兵法書（前一四〇～前一一八）

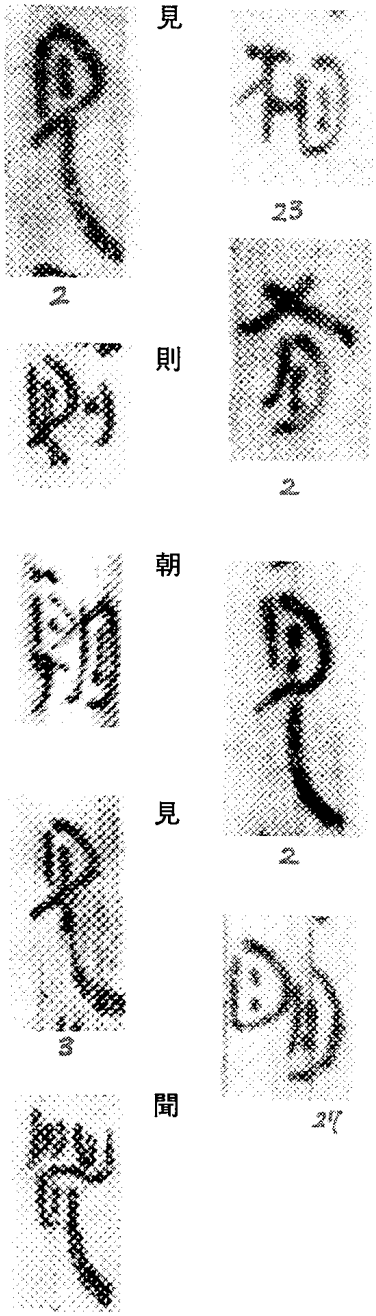


図23　馬王堆漢墓竹簡　雑禁法

これは尹湾漢墓出土の簡牘（図24）ですね、尹湾というのは江蘇省ですね。前漢ですが、そこから出たものでは盛んに使われています。点二つ、点三つに作る字が混ざって登場してきます。このくらい崩れた字がふんだんに出てきます。前漢というのはそういう時代です。ちなみに「為」、「鳥」の点は四つではなくて、ここまで省略が進んでいます。

これは甘粛省出土の武威医簡（図25）ですから、西方のとほうもなく遠いところですね。ところが後漢の時期ですと、もう距離などはあまり関係がないみたいですね。ここでも「知」、「合」などの点は三つ。「君」ではなんと点一つになりました。

図24　尹灣漢墓簡牘（前一〇頃）

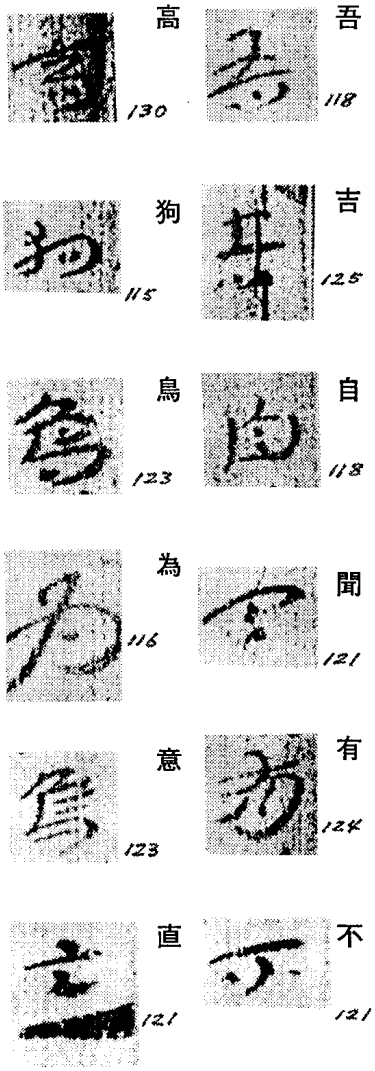


図25　武威医簡　後漢初期（五五～六八前後）

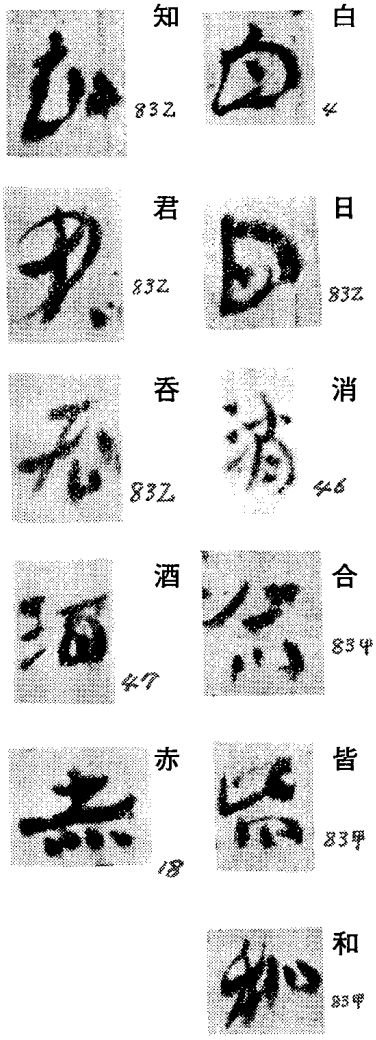


図26に出した字は「見」という字です。長沙東牌楼の古井戸から出土した文字です。この「見」という字はいかがでしょうか。文字中央の斜めの角度なんかは本当に綺麗で、もう日常に使われている状態まできています。今これから映すものは、出土品ではありませんが、よく知られているもので急就章（図27）です。楷書と草隷のようなものが並んで印刷されているものです。ここに載っている「舌」、「合」なんかも三つの点に作り、「吾」などは三つにプラス一で四点になっています。この「君」という字は点を一つに変えてしまいます。この「項」という字は長沙東牌楼と同じく縦をつっきるように書いています。これは出土品の資料ではないので資料としてはまた別な問題ですが、一応こういったところにもそういうものが使われているという一例として載せております。

図26　長沙東牌楼簡牘 後漢　東牌楼七号古井（編号Ｊ７）出土簡

見

図27　章草　松江急就篇

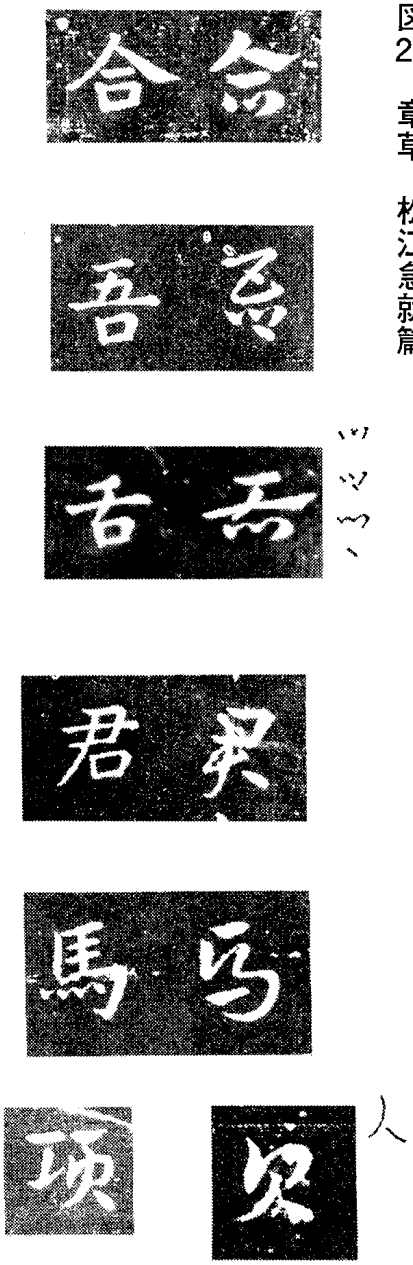


図28は王羲之の龍保帖、遠宦帖に見える文字でよく知られているものです。先ほど述べたようにこの形は横二本から崩したものではなくて、点二つ縦並びから崩れてきた形と考えられます。下のものも縦を突っ切っています。

王献之の鴨頭丸帖に見える「君」字（図29）は点一つにしたやり方です。点一つという省略の方法は、遡れば、里耶秦簡・秦の始皇帝ごろまで遡れるということですね。萌芽ということを考えれば戦国に遡ることが出来ます。点状化の現象は里耶秦簡が最初だと思います。私たちが草書の続け書きを考えるときに、横二本を続けたものがまず先にあったと考えがちですが、今の段階ではそういうことではないということなのです。

図30は集王聖教序ですから、嫌になるほど皆さんが臨書されているものですね。どうでしょうか、「有」という字の縦、

この点が横二本から崩れた格好ではないことがわかりますし、「雨」の左側の縦、そして「明」字など。今日の問題は、一つは横画の線が点に変わったこと、もう一つは点二が繋がって縦の線が「1」に変わったこと。その二つなのです。しかもそれが現れた時期がなんと秦の始皇帝時代から実際に、映像を見てもらったように起こっていたということになるかと思うのです。

図28　王羲之 龍保帖　　王羲之 遠宦帖

見

具

図29　王献之 鴨頭丸帖

君

図30　集王聖教序

この里耶秦簡というものが、私が目を通したものは僅か四千字ちょっとですが、三万六千字も出土しているので、全部を早く見たいのです。最近里耶秦簡の専刊が出ました。四センチくらいの厚い本で、大きさはA4くらいです。しかし図版は悪すぎる。たぶん前の『文物』の図版をそのまま再録して載せたのかと思います。残念です。今三十三簡、四千字くらいしか見てないのですが、これから先どういうものが出てくるか気になります。

図31はこれまでの話とまったく違って書法上の新しい事実です。思い切った太い線を使う、細い線を使う、気前よく書

く、これはもう五ミリや一センチの簡ではできなかった仕事です。ですから書道史の中では木簡や竹簡が紙に変わったことによって、文字が大きく変わったという解釈をする人がいます。確かにそういう部分もあります。紙以前、秦代の簡牘（幅の広い木）でこういうことがすでに行われていたことに驚かされます。実は木の幅が大きくなったことで、これだけ思いきった字が出現したわけです。つまり字が崩れるだけでなくて、美意識が加わってきて、毛筆で美しく書こうとか、面白く書こうとか、そういう感覚が別に働き出した時期でもあると考えられます。青銅器にきちっと記したあの威厳の凄さ、石に彫った字のどっしりした姿とは対照的な肉筆が持っている速度感、シャープさ、リズム感、そういうものがあります。その他に、墨を使った表現ですね。肉筆でこういうことがあると私は字書きなので非常に興味がある。中国人の美意識、古代人の美意識というものを探っています。これなんかは、かなり思い切りがよく、今日の展覧会にいってみているような雰囲気ですよね。今日の本題とは違いますけども、非常に興味深い資料です。里耶秦簡の話はまだまだつきませんが、時間がきましたのでこれで終わります。

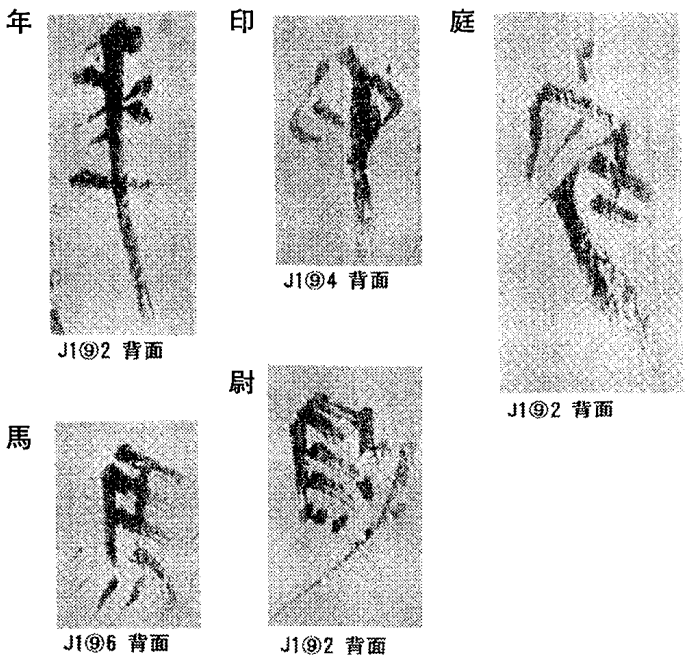



図31　里耶秦簡 筆による書法的意識の出現　太細・強弱・筆勢など